白銀の使者

窓の縁をなぞる馬
たてがみを靡かせ
電車と競い合う
演出に精を出す粉雪
熱を帯びた足音と
共鳴する電子音が
脳裏を透き通らせ
喧嘩せずに調和を招く

ねずみと呼ばれた姿は
走るたび
細雪の肌へと変わっていく
淡い光を浴びながら
スリムな足で翔けていく
人に魅せつけるように
蹄の音を奏でる
競技場や厩舎はもう無い
人の檻は冷たく凍りつき
彼の枷は雪に溶けた

耳障りな人工音が鳴り響き
扉が重たそうに手を広げると同時に
雪の使者と並走し
屋根から雫が滴るホームを抜ける
切れた息が彼の肌を感じさせ
遠くで鳴き声が聞こえた
蹄の音は静寂の中で
音色を奏でて飽和してくれた